

江戸期・明治期日本音楽療法思想

— 養生論及び西洋医学理論の受容史を中心に —

光平 有希
博士（学術）

総合研究大学院大学
文化科学研究科
国際日本研究専攻

平成27（2015）年度

博士論文要約

文化科学研究科 国際日本研究専攻
光平有希 (20130303)

【論文題目】

江戸期・明治期日本音楽療法思想 —養生論及び西洋医学理論の受容史を中心に—

本論文では、日本音楽療法史上の転換期と考えられる江戸期から明治期にかけての音楽療法思想の特徴を実証的に捉えるということを課題として設定し、その形成過程及び独自性を、江戸期養生論と明治期西洋医学理論の受容との関係の中で解明することを目的とする。これまでの日本音楽療法史の先行研究は、いずれも音楽療法関連著作あるいは事例の紹介に留まり、音楽学的な観点からのみの考察が強調されてきたという問題点が見受けられる。それを解決するため、本論文では、治療例の網羅的収集及び検討のみならず、そこに見られる思想に着目し、医学史・音楽史・比較文化史の様々な側面から研究する学際的手法を用いるほか、国際的な視野に立ち、日本側史料と中国や西洋などの海外側史料との比較研究を通じて考察を試みた。

本論文での研究方法は、西洋医学思想受容史の先行研究の手法に倣って、江戸期・明治期に刊行された音楽療法関連史料を網羅的に調査した上で、各書籍及び記事における音楽療法記述の思想源流を探り、その典拠内容との比較分析を行うことで、江戸期・明治期音楽療法思想の特徴を解明するといった、史料調査、典拠同定、比較分析の順で考察を深めた。具体的には、まず江戸期に刊行された養生書の網羅的調査の上、各史料に書かれた内容の典拠を同定し、思想的基盤である古代中国養生論との比較分析を行った。その後、江戸期養生論における音楽理論の位置づけや変遷過程の分析を行うことにより、音楽を予防医学として用いるという思想の受容過程を明らかにした。次いで明治期に関しては、養生書及び衛生書のほか、それ以外の書籍並びに雑誌・新聞記事を対象とし、広い範囲で調査を行った。そして、これらの史料に含まれる音楽療法関連記述の典拠を同定し、それらの記述内容と、その典拠内容とを比較分析することによって、西洋音楽療法の受容過程及び西洋と日本における音楽療法の相違点を明らかにし、その上で江戸期・明治期における日本音楽療法思想の形成過程及び独自性について総合的に論じた。

本論文は序論と結論のほか、3つの章から成る。本論文で取り扱う江戸期及び明治期音楽療法については、その形成過程を考察する上で分岐点と考えられる、日本における伝統的音楽療法論が確立した「江戸期」、西洋の音楽療法論が紹介される1891(明治24)年以前の「明治前期」、日本で音楽療法実践が行われるようになった1892(明治25)年以降の「明治後期」の3期に分類し、各々1章を割いて検討を行った。その際、江戸期には儒医の貝原益軒、明治前期には音楽行政官の神津仙三郎、明治後期には精神科医の呉秀三が、それぞ

れの時代で量・質共に最も影響力ある功績を残していると考えられるため、各章はその人物の著作あるいは実践記録を中心に組み立てた。

江戸期の音楽療法について検討した第1章では、中国古典を基盤とする養生思想の中に音楽が予防医学として用いられていたとの位置づけに至った。また、これらの養生書には、特に貝原益軒の著述に見られるように、江戸期日本の土壌に根付いた音楽を用いつつ、能動的な詠歌舞踏に焦点を当て、詠歌舞踏のもつ心身双方への働きかけが「気血」を養い、それが養生に繋がるといった能動的な音楽活動の効能が強調されていた。なお、同時代のイギリスで展開されていた音楽療法との比較の結果、イギリスでは音楽による身体への影響に重きが置かれていたのに対して、江戸期日本の養生論においては、音楽の「楽」の要素を重視し、音楽が心に働きかける効能を特に重んじるという特徴があるということが明らかとなった。さらに、江戸末期の養生書の内容分析をもとに、この時期には蘭学の流入に伴って、音楽が内臓器官などの身体面に与える効能へも注目されるようになったことを示した。

第2章で検討した明治前期の音楽療法については、開国後に西洋音楽療法論が多量に流入した際、その受容は主に音楽関係者によって行われ、そこでは江戸期の思想的基盤のもとで理解された和漢洋折衷の音楽療法思想が展開されていたことを解明した。また、明治前期の初めは江戸期の影響を受け、能動的音楽療法に関する記述が中心であったが、徐々に音楽聴取による効能を見込む受動的音楽療法に傾倒していく。その際、西洋音楽への言及と共に、神津仙三郎『音楽利害』で見られるように、治療としては患者に馴染みのある音楽が推奨されるなど、音楽の選択に関しては、当時の文化土壌に着目した論が展開されていたことを明らかにした。

第3章で検討した明治後期の音楽療法については、受容の担い手が音楽関係者から医学関係者に移っていき、西洋の音楽療法論がそのまま受容されるようになることを示した。その傾向を加速させたのは、西洋の精神医療を直接学んだ呉秀三による東京府巢鴨病院での実践であり、巢鴨病院関連史料及び呉の著作の分析をもとに、そこでは能動的音楽療法と受動的音楽療法の双方が精神医療の一環として行われていたことを実証した。ただし、西洋音楽療法が模倣されるだけでなく、和楽器を用いるほか、浄瑠璃や浪花節の聴取が推奨されるなど、やはり当時の文化土壌や治療対象者の趣味嗜好に合わせた音楽が用いられていたことを論じた。また、明治40年代においては実験に即した治療を提唱し、病理学などの臨床研究を重んじるドイツ、フランス、イギリスの医学及び音楽療法思想が主流となり、それまで主要な位置を占めていた実践主義的なアメリカからの影響は減少していく。それに伴い、明治後期の日本音楽療法は生理学的、神経学的メカニズム及び実証的な実験に即した音楽療法例の紹介が増加する。

このように、江戸期・明治期日本音楽療法における伝統的養生論から西洋医学理論への変遷過程を分析したが、身体面に重きを置いていた西洋医学理論を受容しながらも、日本側史料においては、主として精神面への音楽の効能を重んじる様相が一貫して見られ、音楽療法の受容過程において、前近代と近代の身体観は途切れることなく、連続的に発展してきたとの結論に至った。